十年後の気持ち

yusupi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十年後の気持ち

【Ｎコード】
Ｎ２４７６Ｆ

【作者名】
ｙｕｓｕｐｉ

【あらすじ】
高校二年生の主人公、裕紀は鉄道研究会の部長だった。ある日、オトコだらけの鉄道研究会に鉄道には興味がなさそうな女の子が入ってくる。なぜその女の子はこの部活に入って来たのか…。そして、この二人がどうなるかを物語った小説です。（作者である私の夢の中ではノンフィクションですが、実際にはフィクションです。）

第1話　出会い

あれから十年経ちました。

君は僕のことを覚えていますか？

君は僕と最初に会った時のことを覚えていますか？

君は僕に最初に告白した時のことを覚えていますか？

始めのうち君は僕を困らせるような世話のやける子だと思っていた。君との時間は、忘れられない良い思い出であり僕は感謝しています。

そして、遠くに行って僕には分からない世界に行ってからも元気でやっていますか？

もし、この本が書店に並んでヒットすれば、きっと君だって読んでくれることでしょう。もし読んでくれたら連絡下さい。

僕は中高一貫校の鉄道研究会に所属している高校二年生、松島裕紀。小学校の時に、鉄道研究会のある中学に行きたいと思い、一生懸命勉強し見事に私立中学に合格し入学した。この学校はいわゆる男子校であった。

しかし、時代の流れで僕が高校一年の時に共学校に変わった。最初のうちは共学というのは実に名ばかりなほどであった。何せ校舎もバスも全部別。確かに、今までの男子校の設備では女子に不利な点ばかり。トイレは男女兼用だったし、更衣室なんて無い。そのため、プレハブ校舎が新設されたのだが結局志願者が少なかった。

翌年の志願者増加のために学校側は新校舎の建設を始めた。それから相変わらず冴えない文化祭があり、新しい校舎が完成し、いよいよ入学、編入試験が始まった。

彼女と出会ったのは、その試験の合格発表の日であった。
僕はずっと撮りたかった臨時列車を撮るため、部活のミーティングの後に急いでスクールバスに駆け込もうとした。そしたら、前から合格証明書と入学手続の書類を持った彼女が歩いてきてぶつかってしまった。

「すみません。急いでいて。」僕はすかさず謝った。
彼女も、「こちらこそごめんなさい。よそ見していました。」
そう一言ずつ交わして、別れてしまった。あの時、彼女が後を振り返ったことはつい最近になって知ったことである。

高校二年生に進級し、やっとのことで鉄道研究会の部長の座についた。中学から一緒にやっている友達、岸野陵が副部長の座についた。そして、二人で勧誘ポスターとクラブ紹介のスピーチの原稿を作った。もちろん、実際にスピーチするのは僕である。

「松島部長、頼みますよ。部長のスピーチ一つでもしかしたら部員が入ってくれるかもしれませんよ？ひょっとしたら女子部員まで期待できるかも。」
「おい、無理させるなよ。ただでさえ緊張しているんだから。」

そう、後輩部員の思っているほど簡単なことじゃないのだ。実際表に立ってみるのは難しいことである。それは今となっても同じ。人前に立つともう失神寸前。スピーチが終わるとやはり手ごたえは無かったと陵に話した。

「ごめん、今年も駄目かもしれない。」
「よく人前に立って喋れたじゃないか。まぁちゃんと説明出来ただけでも俺は十分だな。」
「上から目線だなぁ、お前は…。」
「すみませんね、部長様。」

実際のところ、現在の部員は自分と副部長を含めて五人。やっぱり五人ではあまりにも部活として成り立たないので、この状況はどうしても変えたかった。

次の土曜日にクラブ公開があった。最初のうちは誰も来なかった。諦めて片付けようと思った瞬間一人の女子が入って来た。もちろん、彼女であったが初めてぶつかった時のことなんてすっかり忘れていた。こんな男の城に一人で入って来るなんて何て強情な奴だって思ったのが最初の彼女に対する個人的な印象であった。

「あのースピーチをしていたこのクラブの部長さんにお会いしたいのですが…」と彼女は部員に話し掛けた。「部長〜」と呼ばれて仕方なく出て行くと、
「やっぱり。合格発表の時にお会いしませんでしたっけ？」といきなり言われた。
「すみません。あんまり記憶がはっきりしないのですが。多分あなたが会ったというなら会ったのでしょう。あっちょっと待って。あの日は…臨時列車があって急いで帰ろうとしていたんだ。そしたら、合格した子とぶつかった。その時ですかね？」と言った。
「はい。本当に鉄道がお好きなんですね。」と彼女は部活がどうこうというよりも、パーソナリティーに興味を持ち始めた。
「部活の説明、もう一度してくれませんか？」と彼女は丁寧に頼んだ。
「僕は大勢の前じゃ説明下手だったから、ここでもうまくできるか

分からないけど。うちの部活は…。」

長々とした説明の後、「部長さんのやる気に一票。私も入部して良いかしら？」と言った。

そしたら、今まで黙っていた副部長が「こんな男臭くて、駄目部長ですがそれでも良いなら私どもは歓迎です。」と言った。

クラスを聞くとなんと同じ学年。彼女の名前は川崎遥香。隣町の女子高校から編入したのだとか。クラスは三十人のクラスに対し女子十人だとか。こうして、新しい部活が六人で始まったのである。

部活が終わってから、彼女と陵と三人で街のカフェに出掛けた。

「旅行好きなんだって？」

「ええ。」

「どこに行ったことがあるの？」

「九州とか、広島とか。最近は大阪に行きたいなって思っています。」

「へえ。自分らも大阪がお気に入りでね。国鉄型の車両が…」

「ストップ。マニアックな話禁止！お前はいつもそうだ。」

副部長があまりにも話が長引きそうだったので、僕は陵を止めた。

「あのな、あくまでも鉄道研究会だが、時と場合を考えよう、副部長。」

「すまん、すまん。じゃあ部長代わって。」

「今度のゴールデンウィークなんだけど、部活で旅行をしようと思っていて、せっかく新しい部員も来たことだしここは新入部員の希望で行こうかと思って。その前にゴールデンウィークは予定入ってる？」

「特に無いです。どこでも良いんですか？」
「どこでもと言っても、日帰りで帰って来れるところだからあんまり遠くなきゃどこでも良いよ。」
「じゃあ銚子なんてどうですか？地球が丸く見える丘公園とか行ってみたいんです。」
「おっと銚子電鉄か～。なかなか良いところっつくな。」
「だから、そうじゃないだろ？そういう場所が中心になるだろうから鉄はちょっと諦めろ。」
「多少ならお伴しますよ。何せ鉄道研究会なんですから。」
「何か悪いね。こんな勝手な部活だからいつまで経っても部員が増えないんだよね。」
「でも、趣味があるって良いことじゃないですか？」
「まぁそうだね。この趣味は本当に特殊だしね。」
「俺そろそろ行かなきゃ。ちょっと用事思い出した。模型のパーツ買って来なきゃ。じゃあまたね。」

陵は勝手にも帰ってしまった。
「行っちゃいましたね。」
「そういえば、タメなんだし改まらなくても良いんじゃない？」
「いやいや、部長さんですから。」
「部長なんて名ばかりだから、良いんだよ。その方がこっちも楽だしね。」
「じゃあそうする。部長っていうのも何か堅くない？」
「え？部活なんだし、それで良いんじゃない？」
「裕紀とか？裕ちゃんとか？」

意外だった。さっきまであんなに落ち着いて話していた彼女がまるで別人のような接し方をするのだ。

「あんまり下の名前で呼ばれるのは慣れてないしね。」

「そうなんだ。じゃあ部長で。あっ私のことは普通に遥香って呼び捨てにして良いから。」
「そうかい？」
「まぁこれからも色々お世話になると思うから、よろしくね。」
「う、うん。」
「いきなり変なこと聞いちゃうけど、やっぱり今まで男子校だったから付き合ったこととかないの？」
「（何なんだ、こいつ…）そりゃそうでしょ。あんな学校じゃ何も良いことなんて無かったよ。共学になってやっとまともになったかと思いきや、うちの部活なんて影の存在になっちゃうんだから。」
「そっか。」
「じゃあ君は？」
「私は、好きだった人は居た。でも、付き合うまでには行かなかった。」
「へえ、そうなんだ。」
僕はただ、平然と聞いていた。なぜ、彼女がこの部活にそしてこの僕にそういう話をしてきたのだろうかということも全く知りもせずに。その後、二人は駅前で別れた。

第2話　旅の始まり

部活で約束した旅行の当日、僕は焦っていた。調べたものを失くしてしまったからだ。
やっと見つけたという時にはもう遅刻ぎりぎり。もちろん、着いた頃には駅前にみんなの姿があるものだと信じ込んでいた。
何でみんな居ないんだろう、もしかして置いて行ったのか？と思い、陵に電話を掛けた。

すると、「ごめん、風邪ひいた。休んで良いか？」と返事があった。他の部員二人に電話すると「ちょっと用事が…」とのこと。最後に彼女に電話を掛けてみた。
「遅れてすみません。もうすぐ着きます。」と言った。僕は正直どうしたら良いのか考えた。このまま決行するか、それとも延期するか…。

しばらくして、遥香が到着した。

「遅れてすみません。他の人たちはどうしたんですか？」
「副部長は風邪とか言ってるし、他の二人は用事があるとか。本当にわがままな人たちだよ。」と言うと、「良いじゃない？二人で行くのも。私なら大丈夫。」と彼女から言い出した。

現に僕は女子と二人で出掛けた経験がなかった。そうやって言われて何となく落ち着いて、「じゃあ行こうか」と一歩踏み出したのである。
あとから聞いた話なのだが、これは陵の罠だったらしい。女性関係の噂が全く流れない自分にたいして色々経験をさせてやりたかったという意図があったのだとか。

「もしかして、こうやって女子と二人で出掛けたのは初めて？」
「うん。何か恥ずかしいね。」
「そうかな？そうかもね。これじゃ部活っぽくないし。」
「要するに…？」
「デートってやつ？」
「やっぱり。こんなの予想外だから本当に緊張するよ。」
「まぁ気楽に。Ｔａｋｅ　ｉｔ　ｅａｓｙだよ。」
そんなこんなで話しているうちに目的に到着した。

「この赤と焦げ茶の電車に乗り換えるよ。」
「何か可愛い。この電車のエピソードとかあるの？」
「エピソード？ん…この電車は元々地下鉄の電車だったんだよ。」
「へぇ～やっぱり部長だね。」

そしてのんびりとキャベツ畑の中を走る銚子電鉄に乗って名所も巡った。犬吠岬の近くなのでこのシーズンは、潮風がとても心地良かった。
「何か凄くいい感じの場所だね。」
「そうだね。こうやって電車で旅するのが一番良いよ。」
「うん。何か素敵。」
「電車は車みたいに排気ガスを出さないしね。」
「そうだね。」

僕と遥香は隣の駅まで歩いてみた。雰囲気の良い無人の駅に着いたが、電車はちょうど三十分後。次の駅まで歩くと遠いだろうから、その駅で休もうとしていた。

「何だ？この汚いベンチは。」僕は驚いた。
「座れないぐらい、ゴミが散らかっているじゃないか…。ちょっと

鞄持っていてくれる？」僕は彼女に渡すと、ポケットにしまっておいた軍手をはめ、掃除を始めた。
「ねえー立ったままでも良いよ？」
「いや、僕の気が済まないから。」
「え？」
「後に使う人のことを考えてみな。この周りはみんな農家でしょ？ご老人とか座るかもしれないじゃない？」
「なるほど。」

十五分経って、すぐに綺麗になった。
「わぁ～凄い。」
「ほら、ちょっとの時間でも綺麗になるんだから。」
そうして、二人でベンチに並んで座ることが出来、外川駅で買った銚子電鉄の名物、濡れ煎餅を一緒に食べた。

その日の夕方の帰り際、一番恐れていたことが起きてしまった。それは我が父に二人で歩いている場面を見られてしまったからだ。

「おいー裕紀。彼女が居るなら隠さなくても良いじゃないか。」
「え？だから違うって…。」
「俺見たぞー。駅で女の子と一緒に歩いていただろ？」
「あーあれは、部活の仲間だよ。」
「どう見ても違うと思うんだがな…。良いんだぞ。もうそんな年頃だ。」
「でも、もし本当なら基本的に部活か恋愛かっていうのはどっちかに絞るつもりだから。」
「そうだな。恋は盲目っていうぐらいだしな。お前これ以上視力が悪くなったら電車も車も運転出来なくなるんだから視力を失わないように頑張れよ。それにしても、父さんはお前がどんな彼女、嫁さんを貰うか楽しみだ。こんな鉄でも気に入ってくれる女の子が居る

なら。」

父はおやじギャグを飛ばしつつも案外嬉しそうだった。それはそうだろう。父自身も鉄だった故に、彼女が出来ずに最後はお見合い結婚だったのだから。しかも、いつも父はこう言いながら毎朝僕の髪の毛を整える。

「お前は、俺の大切な一人息子なんだから、俺よりもいい男になれよ。」と。

最後に父はこう言った。

「鉄子の旅とか漫画出たから、今時代は鉄に向いてるんだろう。羨ましいよな、お前は。」

第3話　僕の秘密

ゴールデンウィークが終わり初めての部活で、彼女が居なかったので僕は部員たちにいきなりこう怒鳴った。

「お前ら、本当に部員か？その日は空けとけって言っていたのに、何でこうなる？おかげで、父親には誤解されるしとんだ災難だ。」

「でもさー部長、俺らは部長の為を思って…。」

「何が部長のためだ。部長のためなら部活のためにちゃんと参加しなさい。」

そう言っていた時に、遥香が入って来た。

「楽しかったわ。また部長とデートに出掛けたいわ。」

「そんなに部長と一緒が楽しかったんですか？」陵はすかさず聞いた。

「松島部長は、遥香先輩に対してどんな風に接するのですか？」後輩部員達も聞き始めた。

「おいおいストップストップ。だいたいデートじゃないし～。お前ら何考えているんだよ。計画通りのコースで行っただけだぞ。」

しかし、彼女はこう言った。「私答えたいわ。部長はね…。」

「だからストップ。どうしてそうなるかな。もう帰るよ。」

僕はあまりにも自分が恥ずかしくなってしまい、学校のスクールバスの事務所に避難した。

「社長～、久し振りに遊びに来たよ～。」

「おう部長。ずいぶん来てなかったね。そうだ、夏休みに新車が入

るよ。」
「え？マジですか？」
「今度は観光バスだよ。今度のはスモークガラスで格好良いぞ。」
「ええ。これも普通のバスと同じ塗装にしちゃうんですか？」
「いや、あれはダサいからうちで考えることにしているんだけどね。」
「そうですか～。楽しみです。」

こんな会話をしているさなか、部活ではこんな会議をしていたそうだ。

ずばり、『シャイな部長をどのように変えていくかについて。』

「やっぱり、裕紀は鉄としては優秀な人間だけど、男としてはそこまでじゃないから、俺は部長にもっと男らしくなって欲しいんだ。」
「そうそう、部長にはもっと色々な世界を見て欲しいって自分も思います。」
「鉄ばっかりの部長も良いですが、恋愛をして困ったときの部長を見てみたいですね。」

部長が居なければこういう話になってしまうのである。

「そこまで部長って恋愛に無頓着なんでしょうか？」急に遥香が口を開いた。

「実はね…ある時までは凄く恋愛にも興味を持っていた人だったんだよ。」
「というと？」
「中学二年ぐらいだったかな、裕紀はその時はまだ部長じゃなかったけど、文化祭の時に一人の女子に声を掛けられたんだ。」

「文化祭のお客さんですか？」
「そう。それで、そのお客さんがどうしても裕紀の連絡先を知りたいとしつこく言って来て、仕方なく教えたそうなんだ。」
「そしたらどうなったんですか？」
「デートに誘われて行ったらしいんだけど、その後のことはよく知らなくて。とにかく、それから部長は恋愛には全く興味を示そうとせず、ただ鉄道ばっかり部活ばっかりっていう生活をしていることは確かだよ。」
「ということは、デートで何か嫌なことでもあったのかしら？」
「さあ？それ以上のことを聞くとまた機嫌が悪くなるから。」

それでも、部員たちはどうにかして部長がどうしてそうなったのか？ということを知りたかった。

「じゃあ機会があれば、私が聞いてみましょうか？」
「お願いします。こっちは真面目に心配しているのに、あんな状況だから…。もうちょっと青春して欲しいんです。せっかく共学になったのに…。」

数日後、遥香は僕を呼び出した。

「ねーもうすぐ文化祭の準備を始めるって副部長が言ってたけど、中学の時の文化祭とかどうだったの？」
「中学の頃はたいしたことをしなかったよ。」
「お客さんとかの傾向はどうだったの？」
「中二の時に凄く女子が来てたなー。思い出したくもない。」
「何かあったの？」
「いや、なぜかあの連中は僕の連絡先を知りたがっていて、ある数日後に食事に誘われたんだ。」
「それで？」

「それ以上は話せないよ。だいたい何でそんなことに興味を持つの？」
「いやただ、部長みたいな人がなぜ恋愛とかに興味を示さないのか気になって。」
「僕は興味がないとは一言も言ってないよ。ただ、もし恋愛をしたとしても自分はもう価値がないのに等しい人間なのだから。」
僕は言えなかった。三年前のあのことを。
「そこまで言うのなら…」その日はそれで別れた。

一週間後、また二人で話す機会があった。

「この前話していたことだけど、私の過去の話と交換にしない？」と遥香はいきなり言ってきた。女の子の秘密を聞き出すパターンだ。
「そんな交換するに値する話でもないかもしれないしそんなのでも良いの？」
「別に。私の話は友達にもしたことない初恋の話なんだけどね。それで良い？」
「そこまで言うなら。」
「じゃあ話すね。」

―私の初恋は、中学二年の夏だった。私は、真夏のテニスコートでラケットを振る一人の男子に一目惚れした。私は、その日から何度も何度もその人がテニスの練習をする姿に惹かれて見に行った。ある日、その人は私が毎日見に来ていることに気が付いたようで、「ねえー君、テニス部入りたいの？」と話し掛けてきた。それが最初の会話だった。私はびっくりして、思わず逃げようかと思った。何せ良いなと思った人にいきなり話し掛けられたから。でも、「私は、テニスを見るのが好きなんですが、自分でやるのはどうも…。」と答えた。それから、しばらくこの彼のテニスをしている姿を見る為

だけに学校に通った。たまに、彼はジュースを奢ってくれた。それが彼へ近づける唯一の時間だった。
ある日、いつもの通りにテニスコートに見に行ったら、彼の姿が無かった。もしかしたら部室に居るのかも？と思って、私は部室の方へ向かって歩いていた。そしたら、彼が一人の女子と抱き合ってキスをしていた。私はショックだった。あんなにテニスに打ち込んでいる人にも彼女が居たなんて…と。

「男ならやっぱり恋愛の一つや二つはあるんだと思うけどね。それが何かに打ち込んでいる人やそうでなくとも。でもその気持ちは分かるよ。やっぱり好きな人が別の男と一緒に居るとか耐えられないもの。」
「そっか。じゃあ部長の話を教えて。」
「仕方ない約束だからね。」

―三年前、文化祭の時に女子が数人でうちの部活に来たんだ。それで、あの時にまだ部長でもなく、普通の部員だったから奥の方に座っていた。でも、彼女たちの中の一人がそんな自分にこう話し掛けたのだ。「鉄道面白い？」って。「ええ、人の生活にとって必要な存在でもありますからね。だいたいの人が毎日会社に行くにも学校に行くにも電車を使うじゃないですか？休日や連休には町に出掛けたり静かな場所に出掛けたり。列車も色々な種類があるし、鉄道は面白いですよ。」と僕は答えた。彼女は、「あなたのお話、もっと聞きたいです。もし良かったら連絡先教えてくれませんか？」と言われたのだ。それから数日後に、食事に誘われた。最初は、色々な鉄道の話について質問され、その度に答える形だった。食事が終わってから彼女は散歩に誘った。人影の少ないような公園に辿り着くと彼女は突然、抱きつきキスを始めたのだ。僕はあまりにも急なことだったのでショックが大きかった。それ以来、彼女には会わなかったし、携帯のアドレスも電話番号も変えた。自分はもう価値のな

い人間なんだよ。何とも思っていなければ、名前も知らないような女にもうすでに女に手をつけられている。自分が浮ついていたから自分で未然に防ぐことも出来なかったし、こうして突然起きたことにも対応しきれなかったんだ。だからそれ以来、鉄道のことばかり考えるようにして自分を追い詰めたんだ。

「そんなことがあったんだ。逆に聞いて悪かったような気がする。」
「いや、いつかは分かってしまうことだから。」
「価値が無いなんて言わないで。一回ぐらいなら仕方ないじゃない。」
「今、こうして同じクラブの部員としては良いのかもしれないけど、それ以上になるときっと自分の価値の無さが分かるはずだよ。」

すると、遥香はいきなり目の色を変えてこう言った。

「そんなの実際に付き合ってみないと分からないじゃない！もしかしたら相手がもっといい男に変えてくれるかもしれないじゃない？それが誰であっても、私であっても。」
「え？今何て言った？」僕は目を丸くして、聞き返した。
「…えーっとー」
「今、君は誰かもしくは君自身が僕を良い男に変えられるかもしれないって言ったよね？」
「（あーやっちゃった…）つい…何だか…。」
「いや、良いんだよ。それが君の考え方なのだから。色んな考えを持つ人は世の中には居るさ。」

彼女は自分に悪いと思ったのか、「じゃあまた今度ね」と行って立ち去ってしまった。

第４話　彼女の気持ち

それからしばらく、僕は彼女に会いたくも話したくもなくなった。彼女が一体何を考えているのか理解出来なかったからだ。もちろん、部活にも顔を出さない覚悟で
。
それからしばらく、遥香は自分が言ったことが悪いと思ったのか、何度も電話をくれた上、メールもくれた。でも、僕は電話に出る気もメールに答える気も無かった。そんな時、遥香は陵に相談したそうだ。

「実は、部長がなぜ恋愛をしないのか分かった代わりに、彼と話せなくなってしまったんですよ。どうしたら良いもんでしょうかね？」
「理由聞き出せたの？」
「ええ。でも、それ以来部長は会っても目を逸らすし、電話にも出ないし、メールにも返信をくれないし…。」
「そうか。参ったなー。文化祭のことについて話したいのに裕紀が居なければ何も始まらないし。」
「私、いけないことを言ったのかもしれません。」
「例えば？」
「彼が自分は無価値だなんて言うから、ついむきになってそんなの付き合ってみないとあなたの価値なんて分からないじゃない。もしかしたら、付き合う相手がどんな人でももっと価値のある男にしてくれるかもしれないじゃない？って。」
「別にそれぐらいなら大丈夫だと思うけど。」
「いえ、一番思い当たる節は私が変えられるかもしれないって言ったことだと思うんですよ。
その後、部長の顔色が暗くなったもの。」
「あーなるほど。それは、裕紀にとって嬉しい半面、一番負担にな

るフレーズだね。今、おそらく裕紀は君が自分についてどういう風に思っているのか考えているから会わなかったり、メールに答えなかったりしているんだと思うよ。裕紀とは長い付き合いだし、その気持ち分かるなー。」
「そうすると、私はこれからどのように接すれば…。」
「正直、遥香さんは部長のことどう思っているんだい？」
「え…いきなり言われても。」
「酷い言い方になるかもしれないけど、そういういい加減な気持ちが相手を傷つけることになるんだよ。相手が好きだからそういう気持ちになるもんじゃないの？」
「実際、そうなのかもしれません。いつも部長のことを考えちゃうんです。実は、これでも鉄道研究会に入って以来、鉄道のことについて勉強を始めたんです。最初は部長の説明に惹かれてただ旅行が出来るからという感覚で部活に入ったんですが、やっぱり部長を始めみんなが楽しんでいる様子を見るとつい私もやりたくなっちゃって。」
「じゃあ裕紀は君が鉄道の勉強をしているってことは知っているの？」
「知らないと思います。彼は知らないと思って一生懸命教えてくれるんです。そうやって丁寧に教えてくれるところも部長の良いところだと思います。」
「へえー。案外良いところあるじゃない。裕紀もそれを聞くと喜ぶだろう。ということは、やっぱり君は部長が好きなんだよね？」
「はい。」
「じゃあその気持ちを伝えれば、裕紀も答えてくれるよ。」

もちろん、その事実を知らない僕は一人で考えていた。遥香はどうしてそんなに自分に対して熱心なのだろうか？からかっているのだろうか？それとも本気なのだろうか？
僕は、そのことを本人に聞く勇気も無かった。有頂天になっていく

自分が見えるからなのだろう。

ある日、文化祭の参加団体のリーダー召集に呼び出され、どうしても伝えなければならない連絡事項があったため、久し振りに部活に出た。

「おっ部長、久し振りに出てきましたね。みんな部長を待っていたんですよ。」

「最近、家で考えたいことがあったりして、そろそろ文化祭に向けてミーティングを始めなきゃいけないのに自分が居なかったおかげで進まなかっただろう？」

「いや、そうでも無いよ。むしろ、これから部長にはもっと部活以外で楽しんでもらわなくては困るんですから。」

「どういうことだ？」

「今日、誰か一人居ないのに気づきませんか？」

「遥香か？」

「ピンポン。何か話したいことがあるから河原に居るらしいですよ。」

「河原に？突き落とされたりしない？」

「まぁ俺らはこれ以上干渉出来ないから。簡単に連絡事項だけ教えて行ってくれ。」

彼らの様子はどうもおかしかった。僕はまだ遥香と二人で話したいとは思ってなかったけれど、仕方なく行った。河原に着くと、何やら彼女は石で何かを作っていた。

「どうしたん？こんな所に呼び出して？」

「これ何て書いてあるか読める？」

「Ｍａｙ　Ｉ　ｌｉｋｅ　ｙｏｕ？」片言な英語でこう書いてあった。

「そう、それで答えは？」
「答えって？」
「だから、私は裕紀に聞いてるの。あなたを好きになって良いですか？って。」

いきなりだった。まさかのまさかで、遥香は本気だったのだ。情けないことに、僕はその場で失神してしまった。

僕の意識が戻った時には、もう家に着いていた。相変わらず、僕の部屋で父は写真を印刷している。

「おう裕紀、やっと起きたかー。今日もまた電車の写真撮ったぞ。ほら。」
父はいつもこの調子である。そして、こう言った。
「お前急に倒れたんだってな。陵君がおぶって確か遥香ちゃんっていう女の子が荷物を持って帰って来てくれたんだよ。後でお礼言っておけよ。」
「え？全然知らない。」
「それより、女の子がお前が石にぶつけて頭を打ってないか心配してたぞ？どこに行っていたんだ？」
「その記憶も微妙…川の方だったっけ。何でそんな所に行ったんだろう？」
「まぁ良い。ゆっくり休めよ。」

父が部屋を去った後、記憶を辿った。
確かに、遥香は僕に「好きになっても良いのか？」と聞いた。もしかしたら夢だったのかもしれない、でも現実に河原で倒れて家まで送ってくれたのは事実。

翌日、僕は思い切って遥香に聞いてみることにした。

「おはよう。」
「おはよう、昨日大丈夫だった？」
「まぁ。それはそうと、君は昨日Ｍａｙ　Ｉ　ｌｉｋｅ　ｙｏｕ？と並べた石を見せたよね？それは冗談でしょ？」
「本気だけど…。」
「それはどういう意味？」
「私は裕紀が好きっていう意味。もう倒れないでよ。」
「いや、二回目だから。へえそうなんだ…マジかよ？君はこういう男が好きなのかー。」
「そう、私はこういう男が好きなの。それで答えは？」
「好きになっても良いけど…中途半端が一番迷惑だな。」
「それは分かっている。副部長にも同じことを言われたから。私は部長が他の女の子の友達にも羨ましがられるようなもっと良い男にさせるから。そして、私自身も裕紀に好かれるような女性になるから。」
「もう勝手にしろよ！」
そうして、僕は遥香と付き合うようになったのだ。実際、彼女の強引な感じは憎めず、むしろ愛らしくて好きだった。

第5話　祖母の願い

実際、付き合うようになると周りからの反応が大きかった。
共学に変わってから作られるようになった学年新聞では鉄研にビッグカップル誕生という大きな見出しが出るほどだった。部長の心を開いた天使は新入部員だったとまで書かれていた。部活でもみんなの対応は変わっていた。週に二度、ミーティングを開こうと思って彼女と共に部活へ行くと、
陵に、「今日はいい天気だし、デートに行ってらっしゃい。」と帰されてしまうのである。

他にもスクールバスの社長さんや担任教師まで、皆が僕と遥香はお似合いだと言っていた。土日はデートらしいデートとは言えないが、やっぱり僕の気持ちとして趣味を解って欲しい気持ちがあって、今までのように色々な鉄道に一緒に乗りに行った。

そうして、待ちに待った夏休みがやって来た。

うちの部活では、大阪へ旅行に行くことになった。しかも、予定の半分は二人で過ごしても良いとの注意書きまで書いてあった。どれだけカップルにたいして良い待遇な部活なんだと思いきや、実は今回はそれぞれ彼女持参という企画だったとか。僕は初めて副部長の彼女、竹内由美と対面することになった。陵の彼女は、一つ下の後輩で、非常にしっかりしていて、面白い子だとか。

大阪へ行く日の前日、急な訃報が飛び込んだ。僕の祖母が急に倒れ病院に運ばれたものの助からずにその日の夕方に亡くなったのであった。僕はその祖母とは特に思い出は無かったからどうでも良かった。なぜなら、祖母は一番最後に生まれた孫の僕を全く可愛がろう

とはしなかったのだ。
大事な約束があるのに…と無理やり葬式に連れて行かせた親を憎んだ。
通夜は約束の日の晩だった。僕は忙しさのあまりすっかり陵や彼女に連絡するのを忘れていた。通夜の最中電話が鳴った。

「おい裕紀。どうして来ないんだよ？」
「ごめん。今取り込み中なんだ。」
「遥香を一人にするのか？」
「分かってるよ。あと一時間したら掛け直すから。」

僕はなぜこんな他人の葬式に出席しているのかと自問自答した。通夜が終わり、彼女に電話を掛けた。

「ごめん。実は急に祖母が亡くなって、ちょうど通夜が終わったところなんだ。」
「そうなんだ。」
「悪いね。こんなにタイミングが悪い死に方をするなんて、祖母も酷い人だ。」
「仕方ないよ。人間の寿命ってものがあるんだから。」
「そうなんだけどね。せっかく楽しみにしていたのにね。」
「そういえば、お祖母様とは思い出とかあったの？」
「全く無いよ。この祖母は孫の僕を全く可愛がりもしなかった。実は小学生の時に会ってからこうやって遺体と対面するまで全く会ってなかったんだ。しかも、小学生の時に会ったと言っても会話一つすらしないような人だったから、正直なぜこの人の葬式に出なきゃいけないのだろうって思った訳。」
「でも、お祖母様はきっと喜んでいるはずよ。ずっと話して居なかったあなたが、こうして葬式に来てくれている。もしかしたら、お祖母様は最後にあなたに会いたいって思っていたのかもしれないよ。

」
「そうなのかな…。とりあえず、途中からでも参加するから、みんなで楽しんでいてよ。」

その日の夜、僕は両親に相談して告別式を欠席しても良いということになった。その代わり、遺品整理を手伝うという約束だった。
「翌日の朝の新幹線で行けばみんなに間に合う。」僕の心は葬式の後とは思えないほど軽快だった。その道中に、通夜が終わって祖母の部屋の掃除をちょっとしていた時に見つけた祖母から僕に宛てた一通の手紙を読んでいた。何とか彼らが乗った列車が到着する時間に間に合ったが、その手紙を読んでからの表情のまま。そして、初めて副部長の彼女、由美とも対面し、僕は遥香の隣に座った。彼女は隣に座ってから僕の表情を窺っていた。

「大丈夫なの？泣きたくなったらいつでも言ってよね。」
「誰が泣くかよ。」少し強がった。こんな公共の場所で泣くなんてみっともないと思ったからだ。
「顔に泣きたいってはっきりと書いてあるぞ。」
正直図星だった。僕は無言のまま、「これを読んでみて。」と言いながら、遥香に祖母が書いたと思われる一通の手紙を手渡した。

―裕紀君へ
この手紙を裕紀くんが読む頃には、お祖母ちゃんはこの世に居ないかもしれないけど、勘弁してね。今まで、お祖母ちゃんは全くお祖母ちゃんらしいことをしてやれなかった。今となっては後悔ばかり。本当にごめんなさい。毎年、裕紀君の家から届く年賀状に裕紀君の写真が貼ってあるので毎年楽しみにしていました。これを読む頃にはガールフレンドも出来ているのかな？もしかしたら、結婚しているのかなって考えながら書いています。
もし好きな女の子が出来たら、お祖母ちゃんにも教えてね。お祖母

ちゃんは今まで裕紀君に何も出来なかった分、天国から見守ってあげるから。あと、お祖母ちゃんよりも長生きして子供、孫を大切に。

―　よし子

彼女は声を出しながら読むので、余計に涙が堪え切れなかった。読み終わった後に、彼女はこう言った。

「この旅行から帰ったら私もお祖母様の墓前に手を合わさせて貰っても良いかしら？」

「もちろんだとも。そのつもりで見せたのだから。」

「でも、ちゃんとあなたのことを影で見守ってくれる良いお祖母様だったじゃない。」

「そうだね。」車窓を眺めながら僕は、遠く離れた東京に向かって手を合わせた。そして、彼女はこう言った。

「あなた昨日、タイミングが悪い死に方って言っていたかもしれないけど、私は逆だと思う。こうして、私という彼女が出来たからお祖母様が見守る番になったんだと思う。私たちは少なくともお祖母様に見守られているのよ。」

結局その日、僕は何だか鉄をする気にも観光する気にもなれず、みんなの足を引っ張ってしまった。

第6話　言葉の忘れ物

その日の晩、陵とこんな話をしていた。

「明日はまともに行動してくれないと困るよ。」
「悪いな。どうも今日は気分が優れなくて。」
「明日は、二人で出掛けて来いよ。もっと、彼氏らしいこともしてやったらどうだ。」
「うん。お前も、せっかく彼女を連れて来たんだから鉄ばっかりはやめとけよ。」
しばらくすると、由美が部屋にやって来た。
「散歩しようよ。」
「ああ。じゃあ部長、ちょっと出て来るから。」
「部長も遥香先輩とのんびりして下さいね。」

陵が部屋を出た後、僕は遥香を部屋に呼んだ。彼女もちょうど来るつもりだった。

「何だか、人が死ぬっていうのは心が痛むな。」
「そうね。私も父親を早くに亡くしているの。うちの父は、毎朝五時に出て、帰ってくるのはいつも十二時過ぎだった。家族なのにほとんど接する機会もなく、父は過労が祟って、数年前に亡くなったの。」
「そうだったんだ。」
「それから、今は母が一生懸命働いて、私の教育費を出してくれてる。」
「良いお母さんだね。そういえば、高校卒業したらどうしたいの？」
「んーまだ、何も決めてない。」
「夢とかあるの？」

「夢かぁ…」

しばらく彼女は考えながら間を置いた後、こう言った。

「私、昔から歌手になりたいって思ってるの。」

「え？マジで？意外だな～。」

「うん。たまに暇を見ては歌詞とか楽譜を書いたりしてるんだ。」

「そうなんだ。今度歌を聞かせてね。」

「もちろん。」

夢のある話を聞いていると「何だかいい感じのところ、お邪魔だったかな？」と言いながら、陵たちが帰ってきた。しばらくして、その日の晩は疲れてしまい陵と僕はすぐに寝てしまった。

隣の部屋の遥香と由美は、こんな会話をしていたそうだ。

「どうして、遥香先輩は裕紀部長にたいしていつも優しいんですか？告白もあなたからしたって聞きましたが…。」

「彼の性格はうちの父そっくりなの。どこか頑固で、恥ずかしがり屋、それに何だかほっとけないところ。あと何よりも鉄道が好きっていうところも。」

「そうなんですかー。でも、本当にお似合いですよ。」

「ありがとう。由美ちゃんは副部長とどうやって会ったの？」

「私は副部長と知り合ったのは電車の中です。私が痴漢に合っていた所、近くに居た彼が助けてくれたんです。まさか助けてくれた人が同じ学校の先輩だったなんて思いもしませんでしたよ。」

「そうなんだ。そういえば彼とキスしたことある？」

「ええ、恋人同士なら一回ぐらいあるでしょう。どうだったんですか？ファーストキスは？」

「いや、まだなの。」

「本当ですか？とっくにもう済ませているのかと思いましたよ。」

「そう、実は私が凄く不思議に思っていることは、彼は一度も私に好きって言ったことが無いのよ。」
「確かに不思議ですね。言うタイミングを無かったんじゃないですか？遥香さんから告白告白したから。それとも照れちゃって言えないとか？」
「そうかもね。でも、彼の気持ちも聞きたいわ。」
「そうですね。ここまで一緒に居てまさか嫌いってことは無いですよ。」
「そうだと良いけど。」
…私は少し不安だった。若干押し付けている感じがしたせいでもある。時計が二十四時を過ぎ、私は十七歳になった。
翌日、僕は遥香を連れ、海沿いの須磨海岸の近くの海沿いの撮影地へ行った。飽きることなく来る列車たちを撮り終わった後、砂浜へ行った。

「そういえば僕、今まで君に言い忘れたことがあった。」
「どうしたの？」
「今更だけど、遥香のこと、好きだよ。好きで、好きで溜まらないんだ。」
「本当に今更ね。私も待っていたのよ。そうやってあなたの気持ちを言ってくれるのを。」
「もし、何とも思ってないって言ったらどうしてた？」
「そりゃ、当然あなたを殺していますよ。これだけあなたの為に色々しているのに…って。」
「じゃあ殺されていたかもしれないのか…。」
「それは冗談。それでも良かったの。私って結構一方的だし、あなたに他に好きな人が出来たら諦めるわよ。そういう運命だったんだって。でも、私はあなたが単なる照れ屋さんだって信じてた。」

「そっか。」
「ねぇ、そんなに好きならキスぐらいしてくれたって良いじゃない？」
「へえ？」
「恥ずかしいの？」
「そりゃ、恥ずかしいに決まっているじゃない。」
「実は、今日は私の誕生日なの。」
「えっ？そうだったの？」
「だから私にプレゼント頂戴？」遥香はまるで子供のようにプレゼントを欲しがった。
「急に言われてもね。何が良いの？」
「この場で出来ること。」
彼女はふと急に僕を抱きしめ、キスを始めた。これがファーストキスだった。今までこういうシチュエーションは全く想像出来なかった。こんな日がとうとう来てしまったのかと僕は驚いたが、彼女の唇の温もりに溺れそうになった。この数十秒間の後、彼女はこう言った。
「ありがとう。何ならもう一回良いよ？」
「まったくー。プレゼントは一回だけなんだぞ。誕生日おめでとう。」
こうして、僕らは二人だけの時間を浜辺で楽しんだ。砂でケーキを作ったりして。
一度部屋に戻ると、副部長が居た。僕が荷物をまとめているので話し掛けてきた。
「もう帰っちゃうのか？」

「やっぱり日を改めて俺は来たいからもう帰るよ。」
「何か無理して来させたような感じになっちゃって済まなかったな。」
「でも、楽しめたし良かったよ。あとは皆で楽しく仲良くやってね。」
「気をつけて帰れよ。」
「おう。陵、ちゃんと遥香のことを頼んだぞ。」
「分かってる。じゃあな。」

その夜、僕は彼らを置いて一足先に東京へ帰り、こうして、僕の遠出は終わった。

第7話　夏の暑い一日

その一週間後、僕は部室で色々な雑誌を見ながら、今回の旅行のレポートの原稿を書いていた。

真夏でクーラーの無い部屋で一人きりでやっていた。すると、後ろからガラガラと戸を開ける音。遥香だった。

「こんな暑い部屋でやっていたら熱中症になっちゃうよ？」

「いや、クーラーに頼ると、冬になって風邪をひきやすくなるってうちの担任が言っていたよ。」

「そっか。はい、これ差し入れ。冷たいよ。」

氷いっぱいに敷き詰めたクーラーボックスには桃と梨が入っていた。彼女はその場で剥いてくれた。甘酸っぱく水気のある桃は、すぐに喉を潤した。

「今、何書いているの？」

「乗った車両を全部調べているんだけど、途中で副部長が記録を取るのを忘れちゃったみたいで、携帯の画像とかから調べている途中なんだよ。」

「どれどれ？大阪から環状線…だったね。うーんとその区間は…。」

「え？分かるの？」

「分かるわよ。ここは２０１系の体質改善車だった。そうそう、ここは関西地区の２０１系のトップナンバーの編成だったわ。」

「よく覚えてたね。というか、いつの間に車両の形式とか覚えたの？」

「私だって勉強しているもの。そりゃ、電車と私はライバルですもの。（私は彼に本当のことを話そうか迷った。実は私も鉄子だったということを。）」

「ふふふ。面白いこと言うね。大丈夫だよ。電車よりも君が好きだ

から。」
「そうやって頻繁に言ってくれると嬉しいんだけどな。そうそう、あと今日は見せたいものがあるの。」
「何だい？」
遥香は徐に部屋の外に置いておいたギターを持ってきた。
「曲を作ってみたの。それでどうしても聴いて貰いたくて。」
「そっか。楽しみだなー。どんな曲？」
「聞いてからのお楽しみ。じゃあ聴いて下さい♪」
―Ｍａｙ　Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ♪
私は君に出会った瞬間から、運命を感じていた
君はいつも、ホームで電車を見ていた
そんな後姿が素敵だった
そんな君を私は好きになっても良いですか？
君とずっと一緒に居ても良いですか？
私は君の返事をずっと待ってるわ♪

彼女の歌は僕への思いでいっぱいだった。今更ながらこんなことを歌われると妙に恥ずかしかった。彼女の歌に酔いしられ、レポートの原稿もだいたい定まった後、僕は彼女を連れ、祖母の家を訪れた。叔母の家族が一緒に住んでいて、叔母は不在だったが従姉の泰子が居たので、入れてくれた。泰子は年が近いせいもあって、急にふらっとやって来る僕にはいつも優しい。
「裕紀、外暑かったでしょう？」
「うん。そりゃ夏だもの。」
「あはは。あれ、そちらは？」
「一応…彼女。」

「ああー。この前言っていた。どうも初めまして。裕紀の従姉の泰子です。」
「初めまして。遥香です。」

こうして、紹介している場面が不思議だった。どうも結婚したみたいで若干笑えた。彼女は祖母の仏前に手を合わせてくれた。この日は、何だか幸せだった。普通の彼女なら、こんなことまでしてくれなかっただろう。今となって思うけれど、やっぱりこの年の女の子では、遥香にしか出来ないことだったんじゃないかと思う。
そして、この頃がお互いに幸せを感じていたのかもしれない。

この先どうなるか知らずに。

第8話　ファーストステップ

夏休みが終わり、文化祭のシーズンになった。うちの学校は二学期を始めてすぐの土日で文化祭を行うのが恒例だった。僕は準備日の金曜日も朝早く五時頃に家を出て六時には学校に到着。ちょうどスクールバスの運転手さんたちがバスの掃除を始めている時間だ。

「おー部長。ずいぶん早いね。荷物いっぱいで重そうだね。」
「ええ。何せ文化祭って一年に一度じゃないですか～。気合が入っちゃいますよ。」
「そうかー。何か今年の鉄研は変わり種あるの？」
「さあ？見に来て下さいよ。」
「分かった。楽しみにしているよ。」

そんなスクールバスの会社の社長さんも文化祭に見に来てくれた。お客さんたちが驚いたのは我が部のマドンナであり、僕の彼女でもある遥香が居たことであった。彼女はどこで借りてきたのか、ＪＲ東日本の女性用の車掌の服を着ていた。
僕は突然だった彼女のコスプレに、恥ずかしながらちょっと見とれてしまった。彼女に対して度々お客さんから質問を受けていたようだったが、彼女の返答はとても丁寧でお客さんからの評判も良かった。

僕は外に行ったり中に戻ったりで忙しかったので、ほとんど彼女と話す暇はなかった。まさか、彼女に対してお客さんがマニアックな質問をぶつけて彼女が正確に答えていたなんて後から陵に聞かされて知ったことだった。

文化祭は無事に成功した。彼女の働きもあって、今回鉄道研究会は

努力賞を獲得した。
やっぱり、僕は嬉しかった。鉄研がこうして賞を取れるまでになったこと、そして僕の好きな人がこうして僕の部活のために一生懸命になっていたこと。とにかく全て嬉しかった。
でも、こんな楽しい文化祭もやっぱりあっという間。そして、部活の活気も例年通り無くなっていくのである。部活動をやらなくなって、僕は彼女を鉄道以外のデートに誘うことにした。彼女は戸惑っていた。

「ねえ、何で急に遊園地とかそういう場所にしたの？」
「だって、もう部活しなくても良いじゃない？」
「でも、裕紀の説明聞くのも楽しいからさ。」
「えー？もうだいたいの路線に乗ったからもう十分だよ。」
「もっと勉強したいもの。」
「分かったよ。」
「鉄道が好きな裕紀を好きになったんだからね。忘れちゃダメよ。」
「じゃあ、今度は鉄道博物館にでも行くか？」
「うん。」

本当に嬉しいことを言ってくれる奴だと思った。彼女はどんどん知識を溜めている。このまま鉄子になってくれるのが理想だな～と僕は思っていた。しかし、実際は元々鉄子だったと知るのはこの半年後…。

十月の終わり、僕は遥香から相談を受けた。

「何か、お母さん最近具合が悪いみたいなの。」
「本当に？何か手伝うことでもあるか？お見舞い行こうか？」
「ありがとう。でも大丈夫。それでね、実はお母さんが具合が悪くなる前に私の夢を叶えてくれようと、レコード会社の人を紹介して

くれたの。」
「そうなんだ。」
「来月、オーディションを受けるつもりなの。お母さんがお前の思い通りになれば母さんは幸せだって言ってくれてた。」
「え？急に？高校中退になっちゃうんじゃないか？」
「それでも良いの。」
「君が良くても僕は良くないよ。」
「何で？」
「僕は君と一緒に卒業したいんだ。分かるだろ？」
「私だって辛いの。もっと裕紀と一緒に居たい。」
「良いさ。君はお母さんの為に頑張ってオーディションに合格できるように頑張れよ。」

それ以来、彼女との口数は減り、デートにも行かなくなった。遥香はいつも何かを言いたそうにしていたが、僕の顔はいつもそれを拒み、忙しいふりをしていた。僕は考えていたのだ。ここはずっと一緒に居たい為にそんな夢なんて止めとけというか、別れる覚悟をしつつ素直に夢を応援してあげるか。とにかく、両方同時にやるというのは不可能だと言いたかった。

そうして、いつの間にか十二月になり制服の上にはコートを羽織るようになった。オーディションは十二月十日。期末試験最終日の翌日だった。僕はそれを知っていたが、何も彼女の為に何も声を掛けてやれなかった。しかし、その日の晩に僕の携帯に電話が着た。

「ねぇ、やっぱり欲張りっていけないよね。」
「え？」
「私、失敗したかも。」
「そんなことないでしょ？」
「私には恋愛と夢を同時にすることの難しさが分かる。だって、部

長だって前に言っていたじゃない？鉄と恋愛は一緒にするもんじゃないって。」

「簡単に諦めるんじゃないよ！まだ結果が届いた訳でもあるまいし。」

「でも、もし私がこのオーディションに受かったらどうする？」

僕は急に黙った。そのことを考えないようにと努力していたのに。

「その時はその時さ。僕は君に夢を叶えて欲しい。今まで、君は僕に対して色々してくれたから、今度は僕が君を手伝う番さ。」

「そっか。ありがとう。」

電話が切れた後、僕は複雑な気持ちだった。今のうちに、思い出を作っておくべきなのか。それともしもし彼女が合格して自分と離れ離れになって別れる時のことを考えてあまり深い思い出を作らないで浅いままにしておくか。それは遥香も同じ気持ちだったと思う。彼女は合格するだろうという希望を持ち、再びボーカルやギターの練習に励んでいた。そうして時間だけが刻一刻と経っていく。

第9話　君に捧げる…

クリスマスに陵の家でパーティーがあって、僕は一人で無理やり参加させられた。とにかく、今は遥香の邪魔になってはいけない。僕は彼女に連絡することも罪悪感があった。

「何だかお前は一人だと暗いな。由美が裕紀にプレゼントだってさ。」

「部長さん、これ私から。」

「ああ、ありがとう。」

「そして俺からも。」

「何か僕から渡すものなんて無いから悪いな。」

「いや、良いんだよ。だって、お前に無理強いして来させたようなものだもの。二人だったらお前も来やすかっただろうにな。」

「良いんだ。気にするな。」

この日は静かに過ごせた。陵たちのプレゼントは僕の心を和ませた。なぜなら、久し振りに見る鉄道模型のキットだったから。同封された手紙にこう書かれていた。

「お前は、別れるってことを知らないから別れた時のショックを考えて今のうちに対策を考えておけ。一応、これでも作って何とか気を紛らわせてろ。お前は不器用だから心配になったらいつでも呼べ。」

「何だよ、別れる前提でこんなもの寄こしやがって。」

こうして、僕はそのキットを作り始めたのである。

一月、ちょうど三学期が始まった頃にオーディションの結果が彼女

の家に届いた。

結果は…「合格」。

そして、手紙にはこう書いてあった。事務所は神戸にあるので、二月の下旬までに神戸に引っ越してくることと。

しかし、このことを遥香は僕になかなか言えなかった。合格という結果は、僕との別れを意味するからである。僕はある休み時間に彼女に直接聞いてみた。

「そろそろ結果来ただろ？」

「うん。あのね…。」

「合格したのか？それとも？」

「あの…合格したんだけど、素直に喜べないの。」

「合格して、実際歌手になってもいつでも会えるじゃないか。」

「そんな簡単な話じゃないよ。」

「遠くに引っ越すのか？」

「うん。事務所が神戸だからそっちに行かないといけないの。」

「そうか…。」

僕はやっぱりショックだった。それから、遥香は神戸にアパートを探しに行ったりする為、度々学校を休むようになった。もちろん、学校側も事情を知っていたようだった。

僕がしてやれることはもうこれ以上何もないと思った時、先日陵たちに貰って組み上がったばかりのキットを見てふと気が付いた。

「何で灰色なんだ？」

僕はとりあえず組み立てようとして肝心な塗装を忘れていたのだ。

塗料を買ってきて僕は思いついた。

「ここにＩ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕって書いて彼女に持たせよう。」

それから、放課後を使って陵に塗装を手伝って貰った。
完成した車両はやはり彼女と同じぐらい美しかった。

「お前なかなか良いこと思いついたな。」
「思いつきは良いかもしれないけど、技術がないから。」
「でも、これは遥香が見たら泣いちゃうぞ。」
「渡す時はちゃんと箱に入れて向こうで辛くなったら開けろよって言うから。」

こうして、これで最後になるかもしれない彼女へのプレゼントを用意したのだった。

第１０話　最高の誕生日

また時は過ぎて、二月になった。時の流れは本当に早いものだ。実は僕の誕生日は二月五日。それをすっかり忘れていたのだ。

その日の朝、久し振りに遥香から電話が掛かって来た。

「裕紀、今日会えない？」

「良いよ。君こそ大丈夫なのか？」

「私は平気。今日土曜日で休みでしょ？」

彼女と駅前で会った後、初めて彼女の家に連れて行って貰った。彼女のお母さんと会ったのも初めてだった。

「初めまして。いつもうちの遥香がお世話になっております。」

お母さんはとても親切な人そうだった。彼女が前に言ったように、顔つきからいうと具合が悪そうだった。

「こちらこそ初めまして。以前、お母様の具合が悪いと聞いていたのですが、その後の調子はどうですか？」

「ええ、お陰様で。」

「お母さん、無理しちゃダメよ。」

「無理なんかしてないわよ。娘の彼来たんだから、嬉しいじゃない。」

彼女のお母さんに挨拶した後、遥香は彼女の部屋に招いた。

「ちょっとお茶持ってくるから。」そう言って彼女は部屋を立ち去った。

部屋を見渡して僕は驚いた。

「何だ、これは…。」

部屋の出窓には、小さい鉄道模型のレイアウト。
そして、壁に貼られた首都圏近郊路線図と京阪神近郊路線図。
カーテンレールには無数のつり革。
本棚を見ると、鉄道ファン、鉄道ダイヤ情報、Ｒａｉｌ　Ｍａｇａｚｉｎｅ、ＲＭ　Ｍｏｄｅｌｓなど各誌が綺麗に並べてある。
机の上には、どうやら彼女が撮ったと見られる列車の写真が…。僕は言葉を失った。

そうしているうちに彼女が部屋に戻ってきた。

「お待たせ。」
「この部屋、どうしたの？」
「え？この部屋？私の部屋だけど。」
「いや、それは知ってる。そうじゃなくて、どうしてこんな凄い部屋なの？」
「仕方ないから種明かしをしてあげよう。実は…、私も鉄子でした。」
「え？」
「裕紀の説明、たまに間違っていたぞ。私知っていたのよー。」
「ウソー？」
「実は私の父は鉄道員だったの。それで、私の父は鉄道が大好きでこうしていっぱいコレクションをしていたの。私は父と接する時間が無くて、本当に父が亡くなってから父がどういう人だったのか？というのを知りたくなって、父の部屋を見ていたの。そしたら、こうやって色々な雑誌があったり路線図が貼ってあったりして。父の机の上には毎日書いていた日記があった。毎日娘と会話も出来ないのは寂しいとか書いてあったけど、もし時間が許すなら、一緒に列車で出掛けたかったって書いてあった。父は私にも鉄道を好きにな

って欲しかったんだって思ってそれ以来、私は一生懸命鉄道の勉強をしたの。」
「そうだったんだ。じゃあ文化祭の時のあの征服は？」
「あれは、お父さんの同僚だった人の娘がグリーンアテンダントで、その人に借りたの。」
「それも凄いな。」
「それよりも、今日は裕紀の誕生日でしょ？」
「え？今日だっけ？」
「二月五日。２０５系の日。覚えるのも簡単よ。」
「そっかー。すっかり忘れてたよ。というかどうやって知ったの？」
「泰子さんがこっそり教えてくれたのよ。はい、これ誕生日プレゼント。」
「そうなんだ。ありがとう。」
「今プレゼント開けてみて。」

開けてビックリした。何と手編みのセーターだったのだ。

「これは、手編み？」
「うん。ちょっと下手だけど。」彼女は顔を赤らめながら言った。
「ありがとう。大事に着るよ。」
さらに、彼女は僕を見てこう言った。
「そういえば、随分髪の毛伸びてきたね。最後いつ切った？」
「うーん、十月だったかな？」
「今、切ってあげようか？」
「怖いな～。変な風にされそう…。」
「いや、そんなことはしないわよ。もちろん、格好良くしてあげる。」
「本当？」
僕は遥香の好意に甘えて、散髪して貰った。切って貰ってる最中は

何だか恥ずかしくて、何も話せなかった。

「はい、出来上がり。」

「これで完成？」

「うん。」彼女はそう言うと正面に座って、「これでいい男になった。」と満足そうに言った。

それから晩御飯もご馳走になった。遥香が作ってくれた春巻きは韮やスクランブルエッグなど非常にシンプルだったが、凄く美味かった。帰りも送ってくれた。

「今日はありがとう。髪もさっぱりしたし、美味しい春巻きも食べれたし。」

「そう？満足して頂けて良かった。」

「もうすぐ、行っちゃうんだろ？」

「うん。」

「準備出来たのか？」

「まだ。」

「じゃあ、ちゃんと準備しなきゃダメだぞ。」

「うん。」

「じゃあまたね。」

「バイバイ。」

こうやって見送られるのは、悲しかった。何日か経てば自分が見送る番になるからだ。いつ、また会えるか分からない人を見送るのは辛い。

第１１話　夢への発車ベル

その九日後の二月十四日に、予定よりも早く彼女は神戸へと旅立つことになった。ちょうどその日はバレンタインデーであった。

「わざわざ東京駅まで見送りなんて来てくれなくても。」
「いや、良いんだよ。」
「寂しくなるじゃない。」
「はいこれ。プレゼント。」
「今開けて良い？」
「駄目。デビューしてもし辛くなったら開けて。」
「えー。じゃあ私も。はい。今開けてね。」
「何だろう？」
「今日バレンタインデーでしょ？裕紀は甘いチョコレートが嫌いだからビターにしといた。食べてみて。」
「じゃあそれを信じて。」
「どう？」
「この苦さがちょうど良いね。」
「良かった。甘かったらこの場で捨てられていたかもしれなかったしね。」
「さすがにそんなことはしないよ。三十分後ののぞみでしょ？」
「うん。Ｎ７００系だよ。」
「ああ、そっか。僕も乗ってみたいな。」
「本当は５００系が良かったんだけど、本数少ないでしょ？今度遊びに来れば良いじゃない。」
「でも、君だって歌手としてこれから練習とか、色々大変だろうに。」
「まだ分からないよ。でも、必ず手紙とかメールとか書くからね。」
「本当かな？」

「浮気しちゃダメだよ。私ちゃんと陵たちに裕紀のことよく頼んでおいたから。」
「君以上に可愛い子は居ないから大丈夫。それに君だって僕の性格知っているでしょ？自分から他の女の子になんて手を出せやしない。それに誰にも相手にされないよ。」
「それはどうかな？私が思うに最初に会った時よりもあなたは確実に良い男になった。それは私のおかげじゃない？」
「そうかもね。君こそ浮気するなよ。音楽業界にはもっと格好良い人が居るしな～。」
「分かってる。私からあなたに告白したんだもんね。私が浮気したら、あなたが可哀想だし。じゃあそろそろ時間だから。」
「うん。またね。」

あっさりと別れてしまった。

確かにこんなにあっさりと別れるのはおかしい。

そう思いつつも、家に帰るために新幹線のホームとは逆の京浜東北線のホームに向かって歩いていると、ふと後から誰かに抱きつかれ、その声は、

「裕紀、最後に何か忘れてない？」と囁いた。振り返るとやっぱり遥香だった。

「もう時間でしょ。乗り遅れちゃうよ。」

僕は冷静になって言った。

「もう一度…、もう一度、キスして。」

僕は首をこっくりと縦に振った。
駅の雑踏の中の甘い刹那だった。

「さよなら、ありがとう。」
彼女はそう言って神戸へ旅立った。

第１２話　ひとりの自分

高校三年になって、僕は進路で悩んでいた。

何せ、鉄研ばっかりやって来たので、高校三年になったら卒業へ向けて就職か、受験か、留学か、その三つの中から選ばなければならない。彼女のことなどすっかり忘れていた。それでも、一か月に一度は鉄研にも顔を出すようにしていた。同学年の陵も同じように。

「ああ進路なー。どうするかなー。」

「本当に。もうこの学校も卒業だもんな。」

「久しぶりに鉄研に出たって愚痴ばかりじゃ楽しくないですよ。」

「本当にそうだね。それで今年の文化祭どうする気だよ？新入部員も入ったことなんだし、うまくまとめろよな、新部長。」

「分かりましたよ、会長。」

僕の愛称はいつの間にか会長になっていた。部長を退いた後でも存在価値を保ってほしいとの後輩たちの粋な計らいだったが、やっぱり恥ずかしい。

「それより会長。僕たち、今良い案を思いついたんですよ。」

「何？」

「会長と遥香先輩の話を小説にして、文化祭で発表するっていうのはどうでしょうか？」

「いくらなんでも今の裕紀の心理状況を考えるとそれは無いぞ。俺だって、彼女と別れていきなり思い出を小説として書かれたら嫌な気分になるぞ。」

「でも、面白そうだな。俺さえ我慢すれば良いんだろ？もし、これが出版社の人の目に入って漫画化、アニメ化、ドラマ化、映画化さ

れればもう学校から出される部費なんて頼らなくても良いしな。やってみろよ。」

最初は抵抗があったが結構乗り気だった。

「でも誰が書くんだ？」

陵の発言で、その場が凍りついた。結局その話も無くなった。

高校三年の夏は短い。

夏休みの間、僕の進路は定め、予備校に通いながらひたすら志望校の過去問を解き続けた。一方その頃、遥香はデビューへ向け毎日ギターやピアノやボーカルの練習を欠かさなかった。お互いに連絡を取ることも忘れていた。

そしてまた今年も文化祭がやって来た。今年は特に何も手伝うことはなかった。ただ、会長として来て欲しいと言われたのでぼうっとただ抜け殻のように座っていただけだった。

昨年の遥香が居た頃を思い出しながら…。

第１３話　彼女との再会

それから、何もなくひたすら勉強の坦々とした毎日を過ごし、センター試験の日を迎え、第一志望の試験の日を迎え、合格発表の日を迎えたのである。

結果は見事に惨敗。僕は親に合わせる顔が無かった。家に帰ろうかと思った時、見知らぬ番号から僕の携帯電話に電話が掛かってきた。

「もしもし。」
「…。」
「もしもしー。誰？」
「私。」
「え？もしかして、遥香か？」
「うん。元気にしてた？」
「まぁね。」
「今、東京に来ているの。会えない？」
「会えるけど…。」
「じゃあ新宿駅の八番線の中野側で。」
「分かった。」

久しぶりに遥香と会える。自分の進路のことなんてすっかり忘れて約束の場所へ向かった。そこで彼女は待っていた。

「ごめん。待った？」そう言った瞬間、遥香は僕に抱きついた。
「裕紀、会いたかった。」
「僕も。」

大都会の冬の黄昏時は、寒かったがこうして二人で居るとそんなこ

とも忘れた。久しぶりにこの一年をどう過ごしていたのか二人で話した。彼女はもうすぐファーストシングルを発売するらしい。しかも、それが最初に僕に聴かせてくれたあの曲。
彼女は僕の進路について心配していたようだ。

「高校卒業したらどうするの？もうあと一か月でしょ？」
「ああ。そうだね。」
「受験したの？」
「まあ…。」
「どうだったの？」
「今日、結果見に行って来たんだ。全部ダメだった。」
「本当に？これからどうするの？」
「どうしようって感じだよね。家に帰るのも怖いよ。」
「じゃあ私の部屋に泊まる？」
「いや、それも悪いよ。」
「遠慮しないの。私が美味しい料理を作ってあげる。」
「いや、いいよ。君も疲れているだろ？」
「久しぶりに会ったんだから、私だって彼女らしいことしたいわ。次またいつ会えるのかも分からないし。」
「じゃあご飯だけでも。」
久しぶりに遥香の家へ行った。時々、彼女のお母さんとはスーパーや駅でばったり会っていたのだが、今日は何故か不在だった。
「お母さんは？」
「今日はちょっと友達と泊まりで出掛けてくるみたいで居ないの。だからその代わりに私が家に帰って来たの。」
「そうだったんだ。」
「だから、泊まっても良いのよ。」
「そういう訳にはいかないよ。」
「分かった。いやらしいこと考えてるんでしょ？」
「そんなんじゃないよ。」

「隠さなくても良いのに。」

彼女は積極的だった。この日、彼女は僕の好きな和風ハンバーグを作ってくれた。

「さっぱりしていて、とても美味しかったよ。」

「お口に合って良かった。練習したのよ。」

「そうなんだ。」

「でも普通のハンバーグよりも和風ハンバーグの方が断然簡単よ。ソースを作らなくても良いんだもの。大根を卸して味ぽんを掛けるだけで良いしね。」

「そうだね。」僕はただ頷くばかりである。

「そういえば、あの電車ありがとうね。」

「あっもう開けちゃったの？」

「だって、辛くなったら開けてねって言ったじゃない。車体にＩｌｏｖｅ　ｙｏｕってハートマークつきで描いてあったじゃない？」

「うん。」

「何か嬉しくて、お母さんに写メで送っちゃったもの。」

「でも、一年ぐらいじゃ開けないって思っていたからさ。」

「一年は十分長いわよ。」

「あともう一つ入ってなかった？」そう、僕は彼女へネックレスを送ったのだ。

「今つけてるよ。」

「本当だ。」

「気がつかなかったの？」

「うん。でも、何か凄く久しぶりにあったのに全然雰囲気とか変わってないもの。身につけているものなんて、全く気がつかないよ。」

僕は嬉しかった。

彼女はこのままが一番彼女らしい。変わってしまうと自分とは完全

にかけ離れ遠い存在だと思ってしまうからだ。そして、出来ることならこのまま一緒に居たい。神戸になんて帰らないで欲しい、そう思った。

その晩、彼女の好意に甘えて結局泊めさせて貰った。確かに女の子一人こんな家で居るのは危険だと思ったし、彼女となるべく多くの時間を共有したかったからである。親にもその旨を伝えると、しっかり留守番しろよって言ってくれた。

その日の晩はなかなか寝ることが出来なかった。同じ部屋の中に彼女が居るのだ。今までのように二人で一緒に居るのと違う。完全な密室なのだ。遥香も同じことを思いドキドキしていた。でも、僕は受験が終わって一気に溜まった疲労感のせいで寝てしまった。完全に僕が寝たのを見計らって、彼女は僕の傍に寄ってこう言ったそうだ。

「これからも応援してね。私も頑張るから、裕紀も頑張って。自分を信じればきっと、良い進路に行けるはずだから。」

そう言って、僕の知らないうちに遥香は三度目のキスをしたのだ。

朝になり、僕は近くで寝ている遥香を起こさないように、書き置きして出て行った。

―家に一度帰るけど、しばらく旅に出るかもしれないから連絡はしないでね。と言っても、君はこの一年も連絡くれなかったから、そんなことはないと思うけど。これからデビューだろ？みんなに好かれる良い歌手になれよ。―裕紀

「これで良いだろう。」そう言って、遥香の家を後にした。

第１４話　僕の進路

私は、起きて裕紀が居ないことに気が付いた。時計を見たら、もう十時。

「裕紀〜？」私は彼を探したけれど、机の上の一通の書き置きしか見つからなかった。

「裕紀、頑張るわ。頑張って皆に好かれ、一人前の歌手になったら、あなたと結婚したい。」

そう心に決め、私は母に会ってから神戸へ帰った。

僕は、家に帰って一先ず親に謝った。

「ごめん。言い訳なんて出来ないのは分かってる。全部ダメだった。」

「でも、裕紀はよくやっていたよ。」

「そうそう。気を取り直してもう一年頑張りなさいよ。」

「でも、もう一年は無理だと思う。自分でそう思う。」

「父さんたちももしものことを考えたんだけどな、こんなのはどうだ？」

ふと父が徐に留学のパンフレットを取り出して見せてくれた。

「これは？」

「オーストラリアに留学なんてどうだ？」

「オーストラリアのどこ？」

「ブリスベン。」

「え？」

「俺も色々考えて、お前は実は経済学なんてやりたくないんじゃないかって思ったんだ。お前は鉄道も好きだけど旅行も同じように好

きだろ？観光学なんてどうだ？」
「そんな学科があるの？」
「ああ。裕紀が一生懸命にやるというなら、俺は行かせてやりたい。」
「本当に良いの？」
「お前の将来の為だ。本当にやりたいことをやりなさい。」
確かに経済学とかは大まかな感じで自分としてはあまり気に入って無かった。父は家から通える範囲の大学なら受けて良いと言っていたのに急に海外の大学を提案するなんて本当に予想外だった。
数日後、その留学に関する面接に行き四月には日本を発つことになった。日本を発つ前に陵が壮行会をしてくれた。

「裕紀、お前英語苦手なのに大丈夫なのか？」
「ちょっと心配なんだよな。」
「そういえば、遥香先輩には連絡したんですか？」
「うん。しようと思ったんだけど、彼女はいつも電源を切っているみたいで。」
「そっか～。最後に会いたいだろ？」
「まぁね。次にいつ帰れるか分からないしね。」
「うちらもお前が留学するって決まってから連絡してみたんだけど、全く繋がらないんだ。」
「仕方ないよ。もうすぐCDを出すアーティストなんだから。それにこの前会ったしね。」
「あー言ってたな。元気そうだった？」
「相変わらずな感じだったよ。」
「じゃあ、遥香先輩のことは心配なさらずに、気をつけて行って来て下さい。連絡がついたらちゃんと伝えておきますので。」
「ありがとう。」

こうして、僕はブリスベンへ留学した。

第１５話　異国での再会

留学してから一年半が経った、十月。毎月一度の陵から便りが届いた。

―裕紀、元気か？

こっちは楽しい大学生活を始めて半年が経った。由美も同じ大学だしね。そうそう、この前久しぶりに学校に行ったら、スクールバスの会社の社長とかが「会長どこに行っちゃったの？」って未だに言っていたよ（笑）。ちゃんとオーストラリアで勉強していますと伝えておいた。あっそうそう、封筒の中に二枚ＣＤが入っているでしょ？それが遥香の出したフォースシングルとファーストアルバム。ドラマのエンディングとかにも使われているぐらいだから知名度は高いよ。テレビのインタビューとかでも度々見たりとかね。俺は音楽に疎いから、詳しいことは由美に聞いて頂戴って感じなんだけど。ジャケ写は何か別人っぽいよな。ついつい見とれちゃった。さすが、お前の彼女だな。羨ましいぜ。

そうそう、まだ遥香と連絡つかないんだよ。お前のこと忘れてないと良いけど…。お前はそっちで可愛い彼女作るなよ。―リョウ

陵はメールが苦手なものだから、こうして手書きの手紙を送ってくれるのだ。こういうのを見ると何だか温かみを感じる。僕は以前に送って貰った遥香のファーストシングルのＣＤをパソコンに入れて聴いてみた。

「はぁー、やっぱり歌手になると連絡取れないものなんだなー。今頃、雑誌の取材とか神曲を考えたり、大変なんだろうな～。」

そう溜息をついて、僕は退屈な授業を受けに学校へと出掛けて行っ

た。

…私は次の曲のイメージがどうしても湧かなくて、挫折を感じていた。私は、あれから一年半経ったある日、久し振りに由美ちゃんに電話を掛けてみた。その時、初めて彼が海外へ行ったことを知った。どおりで、ずっと彼の携帯電話は繋がらない訳だ。私はどうしても彼に会いたくなってマネージャーに暇を貰い、関空からブリスベンに飛んだ。

「はあー暑いなあ。着いたけど、本当に裕紀に会えるのかしら。」

「この場所に行きたいのですが…。」

私は、高校時代一番好きだった科目が英語だった。この日の為に習った英語を使って、一人の駅員に教えて貰った住所を見せながらこう言った。電車で中心街まで行って、バスで大学まで行き、別のバスに再び乗り換えるということだった。私は電車とバスに揺られ、お昼前にバスの乗り換え地点に着いた。

バスから降りて、次のバスを待っていた時、私は次にどこで降りれば良いのか分からなかった。地図を片手に困っていると一人の学生らしい女の子が話し掛けてきた。

「何かお手伝いしましょうか？」

「ええ、ここに行きたいのですがどうやって行ったら良いのでしょうか？」

「ここから、１３０番か１４０番のバスで五つ目のバス停がその住所の近くです。」

「ありがとうございます。」

「ところで、こちらには観光ですか？それともお仕事で？」

「実は私の大切な人が一年半前にこの大学に留学したんです。これ

が彼で。」
「私、この人知っていますよ。私の友達です。」
「本当ですか？」
「ええ、でも彼は私よりも三歳年下なので彼を弟代わりによく面倒を見ているんですよ。もしかして、あなたが彼の彼女ですか？」
「ええ。」
「彼は今でもあなたのことが好きみたいですよ。あなたもこうしてブリスベンまで飛んでくるってことは、彼のことが好きなんですね。」
「はい。もちろんです。」
「彼はまだ授業があるのですが、もうすぐ帰ってくると思います。」
そう言いながら、彼女は私と一緒に一時間近く待ってくれた。授業が終わったぐらいの時間を見計らって、彼女は彼に電話してくれて、この場所に来てくれるように言ってくれた。
夕日に輝くこのバス停はとても心地が良かった。ふと、光の向こうから一人の青年がやってきた。

「もしかして裕紀？」私は目を疑った。

彼のようで彼っぽくない。なぜなら、学校に行っていたというのに短パンにサンダルというラフ過ぎる格好で現れたからだ。彼は、学校と言うと私服登校が許される休日でも必ず制服だった。

僕はそう、ただ友達に呼び出されてこの場所に来た。いつも通学に使っているこのバス停に。僕の眼下には思いもよらない光景が広がっていた。友達の隣にはスーツケースを持った若い女性が一人。どこかで見たことのあるような、でも雰囲気が違う。

「ほらユウキが来たよ。」彼女が教えてくれて、私は見上げた。

「遥香？」

「裕紀？」

お互いに顔を合わせながら呼び合い、熱い抱擁をした。

「ごめんね。連絡出来なくて。」

「いや、良いんだ。僕こそ勝手に留学しちゃって悪かった。」

「でも、夢を叶えるためなら仕方ないよ。私にだって好きにさせてくれたでしょ？」

「そうだね。」

「次日本にはいつ帰って来てくれる？」

「当分、帰れないよ。休みがあっても一週間とか二週間じゃ帰れないしね。それより、泊まる場所はどうするんだ？」

「仕事は休みを貰ったから良いし、泊まる場所はあなたの部屋で十分じゃない？」

「またー。僕の部屋は狭いから、駄目だよ。」

「案外広かったりして。」

僕は遥香と再会させてくれた友達に感謝の言葉を述べ、僕は彼女を連れホームステイをしている自宅に帰った。ハウスメイトやホストマザーはみんな目を丸くした。

「ただいま～。」

「ユウキ、その人は？」

「僕の彼女の遥香。」

「ええ？どこで知り合ったの？」

「その話はまた後で。」
「うちに泊まって行きなさいよ。と言っても空き部屋がないからユウキの部屋に泊まって。」
「ありがとうございます。」

ホストマザーは驚いたようだ。この家の留学生のうち彼女が居ないのは僕だけだと思っていたのに、突然彼女を連れて家に帰って来たからだ。無論、ディナーの時にこう言われた。

「彼女はどこに住んでいるの？サニーバンク？ロバートソン？それともランコーン？」
「いえ、神戸っていう日本の都市に住んでいます。」
「じゃあわざわざ来てくれたんだ？」
「はい。彼女はこう見えても歌手なんですよ。」そう言うと遥香は顔を赤らめた。
「今、歌えるの？」ハウスメイトはやはり鋭かった。
「彼女は休暇で来てくれたから、今は歌えないよ。」僕は彼女をフォローした。

その夜、僕は彼女と語り明かした。

「実はね、裕紀に会いに行きたかったのと仕事から逃げ出したかったの。」
「そうなんだ。」
「今、ファーストアルバムを出した所だったんだけど、その先の曲のイメージが湧かなくて、これからも歌手としてやっていけるのかなって急に自信が無くなったの。」
「でも、気持ちを切り替えてやって行くしか無いよ。誰でも自信が無くなることは一度や二度ではないはず。僕だってたくさんあったよ。でも、乗り越えて行かなくちゃ。」

「うん。」
「寝てしまえば新しい明日が来るし、何か美味しいものを食べればちょっと元気の出る自分になるし、自分に自信を持つ為に何か小さい目標を見つけてそれを達成するのも凄く良いと思うよ。」
「何か、先生みたい。」
「僕はいつも自信を失くすから、そういう時はどうしたら良いですか？って留学エージェンシーの先生に聞いたら色々教えてくれたんだ。」
「そうなんだ。何かこっちに来てから雰囲気変わったんじゃない？」
「そう？確かに言いたいことははっきり言うようになったかもしれないね。相変わらずＳｈｙだけどね。」
「そっか。でも、ちゃんと他の国の友達も居たし、安心した。」
「そこまで心配していたの？」

僕は久しぶりに彼女に会ったので、自分の経験を全て話したかった。自分が急に海外へ来て、困ったことや、悩んだこと、あと彼女についてずっとどう思っていたのかも。

第１６話　消えた歌姫

その翌日、僕は学校を休み、彼女を連れてシティに出掛けた。

「せっかく来たんだから、観光して行ってよね。」

「楽しみだな。」

「でも小さい都市だから、あんまり期待しないでよ。」

そう言いながら、二人で街を散策した。その場面をカメラで撮られているとは知らずに…。

「歌手、川崎遥香。超遠距離恋愛発覚！」平成の歌姫、川崎遥香さん（十九歳）に恋人が居ることが発覚しました。お相手は歌手活動を心の底から応援してくれた高校時代の同級生松島裕紀さん（十九歳）。彼との出会いは高校二年生。彼は当時、鉄道研究会の部長で、彼女はその部員だった。何とアプローチは彼女からだったとか。彼女のファーストシングルは始め、彼へ思いを告白した時のフレーズだったそうだ。卒業後、松島さんはオーストラリアブリスベンへ留学。連絡を取っていなかった川崎さんは、友人を通して彼が留学したことを知り、一年半ぶりに会いに行ったようだ。しかし、所属事務所側は単なる休暇であり、相手の男性は単なる現地のツアーガイドであると説明している。（写真、十七日昼、ブリスベンのシティの街中を仲良さそうに歩く二人。）

翌日、日本ではこんな紙面が世間を賑わせていた。彼女の事務所も対応で大変だった。なぜなら、彼女は今海外に居るので連絡が取れない。僕もそんなことを知らずに。

その朝刊が出版された日の夕方、僕のこっちで買った携帯に母親から電話が掛かってきた。

「もしもし。ねー裕紀、ちょっと大変大変。」
「何？どうしたの？母さんがこっちに電話してくるってよっぽど大変なんでしょ？」
「決まってるじゃない。ねえ、そこに　遥香ちゃん居るでしょ？」
「うん。居るけど。何で知ってるの？」
「良いから。とにかくちょっと変わって貰える？」
「良いよ。」
「もしもし。お電話代わりました。」
「ちょっと、大変よ。あなたと裕紀の写真が今朝の朝刊に載っちゃったのよ。事務所の人はあなたと連絡取れないから困っているみたいだし。」
「え？」
「何か、あなたを追跡していた記者が撮って記事にしたみたいよ。」
「はー。私どうしたら良いんでしょうか？」
「ちょっともう一回うちの子と代われる？」
「何？」
「裕紀、遥香ちゃん連れて日本に帰ってきなさい。」
「はい？」
「だから、帰って来いって言っているの。」
「何を言い出すんだよ。急に。」
「来週、再来週休みでしょ？一年半も帰ってないんだから、そろそろ一回ぐらい帰ってきなさいよ。お父さんも寂しがっていることだし。」
「はいよ。」
「じゃあまたね。」

母はそう言って、電話を切った。僕は急いで、フライトの予約を取った。
それから出発の日まで、授業が無い時間は彼女と買い物に出掛けた

りして過ごした。授業中は、日本人の女の子の友達に頼んで遥香と一緒に居て貰った。やっぱり心配症だからである。

その五日後、僕は彼女と共に飛行機で帰国した。

第17話　落ち着かない帰国

成田空港に到着し、僕はほっとした。

「やっと東京に着いたね。」

「一年半ぶりだ。こっちは寒いのかな？」

「うん、もう十一月だしね。あっ、そうそうこの前フォンカード使って事務所と連絡取ったときに言われたんだけど、ちゃんと変装しなさいって。あと、何を言われても黙っていることって。」

「え？何でだい？」

「多分、私たちの帰国を待っている記者がいっぱい居るからでしょう？私、事務所には裕紀のこと言ってなかったの。だからこうして余計に大ごとになっちゃって。」

「そうなんだ。」

一応彼女の言うように帽子を深く被って到着ロビーに出るとやはり、報道カメラばかりだった。僕らはそれを避けるように歩いたが、彼女のスタイルが良いこととそれに不釣り合いな僕が一緒に並んで歩いているせいもあって、結局バレてしまった。

「川崎さん、この方が交際をしている彼氏ですか？」

「川崎さん、事務所では交際は一切無いとのことですが？」

記者はしつこかった。次の瞬間、前から彼女のマネージャーらしき人が来て、彼女を連れてさっさと行ってしまったのである。「裕紀！」彼女は僕を呼んでいた。

質問の嵐は僕に降りかかってきたのは言うまでもない。

「川崎遥香さんについて、どう思っていらっしゃいますか？」僕は

彼女が最後に何も喋るなと言った言葉を守れず、とうとう言ってしまった。

「私は…私は彼女のことが好きです。彼女はこうして歌手として忙しい中でも僕に会いに海を越えて会いに来てくれました。僕は彼女のそんな思いを台無しにしたくはありません。」

そう、インタビューに答えていると「おーい、こっちだ。迎えに来たぞー。」と陵がやって来た。陵は連日の報道を知っていてわざわざ車で迎えに来てくれたのだ。

一人になってしまった僕にとって心強かった。

「陵〜。久しぶり。」

「おい、挨拶は後だ。とにかく急ぐぞ。あいつらは自宅でも待ち構えていると思うから、とりあえずうちに車で直行するぞ。来い。」

「悪いな。」「松島さん、松島さん」と後ろから記者達の僕を呼ぶ声が聞こえたが、僕と陵は急いで車に乗り込んだ。

「はーとりあえず、助かった。」

「お前、こう言う時に二人で帰ろうとするのは危険だ。」

「そうなのか？」

「実はお前の親父さんが迎えに行くって言っていたけど、親父さんの家はもう完全包囲されていたみたいで、代わりに行ってくれって言われたんだよ。でも、今親父さんは君を迎えに行くふりをして、おとりとして撮り鉄に出掛けたんだよ。ちょうど今頃、親父さんの車を追った記者たちは騙された〜って後悔しているんだろうな。」

「あはは。相変わらずオヤジらしいな。」

「しばらくうちに泊まると良い。記者たちが諦めた頃にご両親が連絡をくれるって言っていたから。」

「そうかー。」

結局、その日の夕方にはほとんど撤収したみたいで、一年半ぶりに我が家に戻った。

「おう、元気だったか？」

「まぁね。」

「それにしても、留学から一時帰国しただけでフラッシュを浴びるようになるなんて、すばらしい息子だ。」

「何馬鹿言ってるのよ。おかげでうちは迷惑しているんだから。」

「本当に悪かったね。」

「父さんのおとりは記者達が腰を抜かしたよ。息子が留学から帰ってくるというのに、鉄道の写真を撮りに行っているなんて馬鹿な父親だって。」

「でも、それが父さんらしくて良いじゃない。」

「そうそう、おかげでこんなの撮れたぞ。原色のＰＦ！」

「また始まった…。」

まぁこの先は皆さんも分かる通り、母もこのように飽きれ始めたということはマニアックな話になる訳なので一先ずこの辺で中止。

でも、僕は一言父を紹介させて下さい！

「こんな人ですが、僕にとって世界一でたった一人の父です！」

こうして、久しぶりにゆっくりとした家族団欒を楽しんだ。

遥香と連絡が取れないまま、日本に帰って数日経った。朝の情報番組をつけたら、遥香のニュースであった。

「歌手の川崎遥香さんが、交際関係を巡って所属事務所と対立して

いることが分かりました。川崎さんは、交際を認める記者会見を開かせないのなら事務所を辞めると言っており、事務所側はオリコンで常に上位を記録している川崎さんを手放さまいと交渉を続けているようです。」

僕は驚いた。つい何年か前までは他人事のように思って来たことが今自分と遥香の問題として目の前で起こっている。その時、彼女が電話を掛けてきた。

「裕紀、今何してる？」
「ん？テレビ見てるよ。」
「何か迷惑かけちゃってごめん。」
「いや、良いんだよ。」
「ねえ、今から高校で会わない？」
「そっちは大丈夫なの？」
「うん。今、由美ちゃんの家だから。」
「そっか。じゃあ高校のどこで？」
「河原のところで。」
「了解。」

僕は、家の前に群がっている記者たちを何とか振り切って約束の場所に辿り着いた。

第１８話　辛い別れ

「遅くなってごめん。」僕はそう言いながら、彼女の前に現れた。

「大変だったでしょ。」

「まぁね。」

「私、どうしたら良いと思う？」

「僕に聞かれても。」

「私はあなたを好きなのに、あなたを諦めて世間体を気にする事務所のせいで歌手を続けなければならないのよ。」

「それなら…それなら、僕を諦めろ。それしか方法は無い。」

帰国して彼女と会えなかった数日間、ずっと考えていた。もうこの時が来たのだと。

「それでも良いの？」

「良いはずがない。でも、前に言ったよな。好きなことと恋愛を同時にやって行こうと思っても上手く行くことはないのが普通だって。」

「そうだけど。」

「自分なりに考えてみたけど、一度に何事も上手く行ってしまったら人生で与えられた運を使い尽くしてしまうからなんじゃないかな？人生ってずっと幸せっていう訳じゃないでしょ？辛い時だって悲しい時だってある。色々なことがあるよ。大人になるにつれ、自分の世界が広がっていくし気付くことも多くなる。だから悩ましいし難しいけど、その分喜びも楽しみも大きくなるよ。」

「そうかもね。」

「僕は、遥香に自分の世界を広げて欲しい。僕のことは気にしない

で。歌に集中すれば、もっと楽しいかもしれないし、もっと良い曲を作ろう心掛ければもっと君の曲を聴いてくれる人が増えるかもしれないし。」

「裕紀、あなたは本当にそれでも良いの？」

「それが運命なら仕方ないと思う。もし、これで君と縁が無ければもう二度と会えないだろう。縁があればもう一度会えると思う。僕はそう信じる。」

「でも、まだ別れるって決めた訳じゃないんだから、そんな寂しいこと言わないで。」

「君が曖昧な気持ちだからみんなに迷惑を掛けているんだろ！僕の気持ちなんてもう考えなくて良いんだよ。」

僕は彼女の言葉にじれったさを感じ、ついカッとなって怒鳴ってしまった。すると、彼女は突然泣き出してしまった。

「ごめん…。でも、私が居なくなったらあなたはまた一人になるでしょ？ほっとけないの。」

「僕は、留学してからずっと一人だったからもう慣れてる。心配されなくても大丈夫。遥香は、せっかくこうやって有名になったんだから名前を捨てて逃げ出しちゃいけない。僕なんか忘れろ。そして、自分のレールを進めよ。もう、僕たちはポイントは通り過ぎて、それぞれ別の道を歩もうとしているんだから。もしかしたら、もう一つポイントがあって、合流出来るかも知れない。その時があったら一緒になろうじゃないか。」

僕は彼女を宥めながら、そう言った。それでも、彼女は別れるか、別れないでこのままかはっきりとした答えを出さなかった。しかし、僕の心は決めていた。たとえ彼女がどんな答えを出そうとも僕は彼女と同じ世界に居る人間ではないと分かっていたからだ。僕はその日、彼女と別れてから何だか切なくなった。

とうとう彼女ははっきりとした答えを出さないまま、ブリスベンに帰らなければならない日が来て両親と空港で話していた。

「もう行っちゃうのか？」
「うん、そりゃ長居したら英語喋れなくなるもの。」
「そうだな。次はいつ帰って来る？」
「もう、卒業まで居るよ。また荷物とか送ってよ。」
「分かった。」
「ねぇ、遥香ちゃんのことはどうなったの？」
「もう考えない方が良いみたいだ。うちにだってあれだけ迷惑掛けたんだからもううんざりだよ。スターになったら一般庶民とは付き合ってはいけないんだ。」
「本当にそれで良いの？」
「諦めない限りは、父さんや母さんにも迷惑掛けるだろ。後はもう本人の気持ちと縁だと思うから。」
「おーい裕紀。」出発する直前に陵がやって来た。
「また当分帰って来れないんだろ？」
「ああ。」
「ちょっと、これを渡したい。」
「何だ？」
「実は、遥香が高校の時にお前に宛てて書いた手紙だ。」
「今更なんだよ？」
「お前が辛くなった時に開けると良い。」
「お前読んだのか？」
「いや、遥香がそう言ってたから。」
「でも、諦めようとしている時にこんなものを渡されても。」
「忘れた頃に見ても良いじゃないか。とりあえず、持って行け。」
「そうか。ありがとう。」
「じゃあ気をつけてな。」

「うん、泰子にもよろしく。あと、由美にも。」

その晩、ブリスベンへ行く飛行機に乗った。

着いてから数日、やっぱり、しばらく遥香のことが忘れられなかった。友達にもハウスメイトにも「何かあったのか？」と言われた。僕は姉のように接してくれて僕と遥香を再会させてくれた友達にこう言われた。

「あなたがもし本当に彼女のことが好きならば、待つべきでしょう。しかし、私はこういう場合どうすれば良いか分からないから、時の流れに任せる。もしかしたら、彼女以上にあなたのことを思ってくれる人が出来るかもしれない。今は辛いかもしれないけど、きっと辛い思いをした分、良いことがあるから。」彼女の言葉は大きかった。

第１９話　幸せと絶望

それから数年後、僕は無事に大学を卒業して、旅行会社に就職した。

その翌年に、僕は大学時代に同じキャンパスで出会った日本人、京子と結婚した。彼女は、高校時代マレーシアに留学した後、同じ大学へやってきた。彼女は日本人と言っても、ただ単に両親が日本人で日本語が喋れるだけで日本でのニュースなどは全く知らない。もちろん、僕の身に起こったこの大騒動も知らなかった。

彼女は遥香のようにとても優しかった。僕が彼女に惚れたのは、僕が自信を失くしていた時に、彼女が「裕ちゃんなら大丈夫。」と手を握りながら言ってくれた言葉だった。彼女を両親に紹介した時、やっぱり両親は喜んだ。遥香とのショックから立ち直れないんじゃないか、口ではもう良いやと言っていた僕がそれでもずっと遥香を待ち続けているのではないか、とにかく両親は心配だったようだ。

結婚して五年、彼女は子供を身ごもり幸せの絶頂だった。

僕は仕事が忙しく、出張する日がたくさんあった。なるべく時間を見つければ、彼女を産婦人科まで車で連れて行っていたのだが、その日は大事な会議があって休めずに普通に会社に行った。

「忘れ物は？」

「大丈夫。ごめんな、今日は休めないんだ。タクシー呼んで病院行って来いよ。」

「大丈夫。心配しないで。今日も早く帰って来てね。」

「うん。じゃあ行ってきます。」

「行ってらっしゃい。」

妻はこうして玄関で毎日「忘れ物は？」とか「早く帰ってきてね。」

と言いながら手を振るのが日常的だった。まさか、この日常的な光景がこれで最後とは露知らず、僕は会社に出掛けた。

会社で会議の準備をし終わった後、昼休みの食堂で、いつものようにテレビを見ながら妻が作ってくれた弁当を食べていた。

ふとニュースの速報が流れた。

「東京都内で飲酒運転の車によるひき逃げで妊婦が死亡。　…松島京子さん（二十七）」

そのニュースを見て僕は急いで、家に帰った。やはり、妻は居なかった。

家には、警察が居てやっとのことで変わり果てた京子と対面出来た。信じられなかった。

「もし、僕が会社を休んで、ちゃんと京子を病院に連れて行ってあげて居ればこんなことにはならなかったのに…。」自分に責任を感じた。

僕は京子の通夜と告別式が済んだ後、その罪の重みから仕事のやる気も失くしてしまい、とうとう仕事を辞めてしまった。

一日中部屋にひきこもり、何度も自分を傷つけ、自分も京子の所へ逝こうと試みた。両親や従姉の泰子が心配して、毎日交代で面倒を見に来てくれるようになった。

第２０話　蘇る記憶

ある晩、確か京子の四十九日の晩であっただろうか。僕は夢を見たのだ。それは、遥香との思い出を振り返るような夢だった。

僕は次の朝、妻が亡くなってからずっと誰にも会いたくは無かったがその夢を見て、ふと友人の陵に会いたくなって、うちに招いた。

「裕紀、久しぶりだな。大変だっただろう。」

「ああ。自分が悪かったんだ。」

「そう、自分を責めるなよ。自分を責めたって前に進めないぞ。」

「分かってる。」

「それより、何か話があるから呼んだんだろ？」

「ああ。実は昨日の晩に遥香との思い出を振り返る夢を見たんだ。」

「そうか。あれから彼女は新曲を何枚か出して、それがまたヒットしたから誰も遥香と連絡が取れなかったな。」

「でも、こんな話していたら京子に申し訳ないから。ただ高校の時が懐かしくってな。」

「そうだな。もう十年も経つんだな。あっ、お前覚えているか？」

「え？」

「二回目にブリスベンに行く時、彼女が高校の時にお前に充てて書いた手紙があってお前に渡しただろう。」

「ああ。」

「もしかして、捨てたか？」

「分からない。実は仕事が忙しかったから、部屋の片付けとかも全くしてなかったんだ。もしかしたらスーツケースの奥にあるかも。」

「じゃあ持って来いよ。」

「ああ。」僕は、留学の時に使っていたスーツケースを納戸の奥から取り出し、開けてみた。

「あった。」僕はその場で開けられなかったので、陵に開けて貰い呼んで貰った。

―裕紀へ

朝のやわらかい光がカーテンから差し込んでくる部屋で今、私は作詞をしながらこの君への手紙を書いています。毎日見かけているのにこうして手紙を書くのは何だか照れくさいですね。私が君と出会ってもうすぐ一年ですね。私にとっての君はかけがえのない存在だけど、君にとってはどうなのかな？次の一年はどう過ごすのかな？また、一緒に電車に乗って出掛けられるのかな？私に何回好きって言ってくれるかな？そんなことも考えちゃいます。こんなに近くに幸せがあるのに、私は夢を追う必要があるのだろうか？なんて考える時もしばしば。そんなこと言ったらあなたに怒られちゃいますね。ねぇ十年後の気持ちって変わるのかな？十年経ってもずっと歌手で居たいって思うのかな？十年後の君はどんな人になっているのかな？どんなに離れてしまったとしても、君は私のことを忘れないで居てくれるかな？どんなに会えない時間が多かったとしても、君は忘れないで居てくれるのかな？そんな不安を思っても私はいつも、君を思っています。

「そうだお前、小説でも書いてみろよ。俺ら、高三の時に皆で書こうって言ったけど、結局書
けなかったじゃないか。でも、お前はこうして時間に余裕が出来たことだし、書いてみろよ。気持ちの整理もつくだろうし、若返るかもな。今のままじゃあ、五十代のおっさんだ。京子さんにこんな所見せていたら、あの世で浮気されちゃうぞ。」

友人の陵に言われたこの一言がきっかけで小説を書き始めた。終日ずっとパソコンに向かってひたすら遥香との思い出を書き続けた。

二週間掛かって、やっと原稿が完成した。

第２１話　想いを詰めた小説

陵の彼女（今は嫁になった）由美は出版社に勤めていたので、僕は由美に渡して誰か出版社の人に見て貰うように頼んだ。

それからさらに二週間ぐらいして、出版社から問い合わせがあった。

「この手のストーリーは、今までに読んだことがないパターンで非常に興味深い内容でした。ちょうど、十年前ぐらいでしたね。歌手の川崎遥香さんとあなたの遠距離交際が発覚したのは。」

「そうでしたね。今となっては自分のことのようには感じませんね。」

「これを見る限りだと松島さんも大変だったんですね。これはきっと沢山の読者が居るはずですよ。是非とも、私の出版社で扱わせて頂いても宜しいでしょうか？」

「ええ、もちろんです。そういえば、一つお伺いしても宜しいでしょうか？」

「はい。何でしょう？」

「彼女は今でも歌手として活躍されているんでしょうか？」

「川崎遥香さんねー。確かあの騒動があった後、一枚か二枚シングルを出してそれが凄く評判が良かったんですが、その後一年ぐらい経って引退されたと思います。」

「そうですか。」

「私どもを含め、たくさんの記者がその後の行方を追ったんですが、掴めないんですよ。」

「今そのＣＤ聞かせて貰っても宜しいでしょうか？」

「ええ。会社の同僚で彼女のファンだった人が居るので、その人から借りてきますよ。」

「ありがとうございます。」僕は久しぶりに彼女の曲を聴いた。聴

いているうちに、やっぱり涙がこぼれ始めた。
「この曲は、彼女を置いて行った松島さんへの思いを歌った曲だったんですね。」
「多分そうだと思います。彼女が私宛てに書いた手紙によると、曲を作るなら全て僕の面影を感じる曲を作ると言っていました。」
「本当に松島さんは愛されていたんですね。」
「ええ。あともう一言、この小説の最後に加えさせて頂いても良いでしょうか？」
「もちろんですとも。」

僕はその日、原稿を一旦持ち帰り、彼女へのメッセージを最後に付け加えた。

後日、この小説が発刊された。

…私は本屋さんに居た。一時期は彼の為に料理をしたけれど、スターになってみると料理なんてする暇がなかった。私は料理をもう一度一から習おうと料理ブックを探していた。歌手をやっていた頃の友人に、「歌手を引退して輝きを失ったら、今度はお嫁さんになるんだから料理の勉強をしなきゃ駄目よ。もう良い歳なんだから。」と言われてしまったぐらい。

ふと、入口の新書コーナーに置いてあるにも関わらず、もう最後の一冊となっていたこの本が目に止まった。タイトルを見て、思った。

「もしかして…」、興味本位で買って、家に帰ってからひたすら読み続けた。

これは確かに彼の小説だった。著者の氏名も松島裕紀。私との思い出がたくさん書かれている。間違いない。

私は本文を読み終え、最後にあたかも付け加えられた数行の文を読み、決心をして希望をかけて出版社へ問い合わせた。

第２２話　二度目のプロポーズ

その日の夕方、僕は都内のカフェに居た。妻が亡くなってからは出版社以外どこにも出掛けてなかった。出版社には無精髭のまま行ってしまったが、従姉の泰子に「今日はまともな格好で行きなさい。ちゃんとネクタイを締めて背広を着て。」と言われたので久しぶりに髭を剃った。ただ、この場所に来て下さいとだけの連絡であった。サイン会を開くとかそういう話なのだろうと思いながら、出版社の人を待った。

私は出版社の人と待ち合わせ、約束をしたという場所へ連れて行って貰った。カフェに着くと、見慣れた後姿があった。「待ち合わせの間も鉄道の雑誌を読んでいるなんて、相変わらずね。」私はそう思いながら、一歩ずつ彼に近づいて行った。

「どうも。ちょっと人と約束していまして、お待たせしました。」と出版社の人が私に声を掛け、振り返るとそこには女性が一緒に居た。

「こちらが、松島裕紀先生です。」出版社の人はそう紹介した。
「裕紀さん、私のこと覚えていますか？」
「はい？」僕はまさか…と思った。彼女がこんなに変わるはずがない、そう思ったからだ。
「私ですよ。遥香です。小説、読みましたよ。」
「ええ。本当に遥香さんですか？」
「はい。だから、こうしてあなたに会いに来たのです。」
「先生、あとは思い出話に浸ってください。あと明日新宿の紀伊国屋でサイン会ですので、忘れないで下さいよ。では。」
そう言って、彼は出て行ってしまった。

「久しぶりですね。あなたとこうして歩くのは。」
「ええ。」
「大変だったんですね。」
「はい。」
「私はあれから、母の病気の介護をしていました。母が亡くなったのは、一年前です。」
「そうでしたか。」
「今でも鉄道がお好きなんですね。」
「ええ。妻ともよく列車で旅行に出掛けたものでした。」
「私もたまにふらっと旅行へ出掛けます。鉄道の旅って良いものですね。」
「ええ。」
「それにしても、全く変わっていませんね。」
「そう思いますか？」
「ええ。」
「あなたは随分変わられましたね。」
「そうかもしれませんね。」

僕はあまりにも綺麗になった彼女をもう一度見てただ、驚いていた。
「こんな女性なら世の中の男性は放って置かないだろう。」僕はこんな質問を彼女にしてみた。

「ご結婚はされたのですか？」
「いえ。何度もお見合いをしたのですが、私は結婚など興味が無いと言って、お断りしていました。」
「そうなんですか。」
それから少し間が開いた。彼女は何かを考えるような素振りをした後、僕にこう言った。

「あの、小説の最後の問いに答えても良いでしょうか？」

「はい。」
「もちろんです。」
「私はバツイチで、妻をまともに愛せなかったような人間です。そんな私でも良いのですか？」
「あなたとこの先、十年後も二十年後も、お婆ちゃんになるまでずっと一緒に居たいです。」
彼女の思いは、高校の時よりも熱く、確かなものだった。

こうして、その半年後、僕は十年の時を越え、川崎遥香と結婚したのである。

最終話　エピローグ

―最後に。

僕はこの小説を書きながら思った。「人生」のレールのポイントはいつ分岐するか、いつ合流するか分からない。ただそのルートはそれぞれの「運命」という名の列車によって決められるのだ。そしてこれからもずっと。

「運命」という名の列車の運転士は、キーマンとなってくれる他人がなる場合もあれば、自分自身になることもある。

やっぱり平坦な場所に敷かれたレールの上をただ単に走るのでは面白くない。山があったり谷があったり、分岐路があったり、落ち込んで暗い地下を走ったり、時にはローカル線のようにゆっくり走り、時には新幹線のように速く…そういうのがあるから「人生」というレールの上を「運命」という列車で走ることは面白い。

それと、僕は子供の時に、電車を好きになるきっかけで父親が見せてくれた電車の歌のビデオでこんな歌を覚えている。

「僕は電車、速い電車、だけど一人じゃ走れない～。」

そう、人生という名のレールの上は一人では走れないのです。様々な人と出会い、様々な体験をし、こうして死という人生の終着駅に辿り着くのだ。僕は、この小説に出てきた仲間たちには本当に感謝したい。

「ありがとう。」

最後になるが、僕が小説の最後に付け加え、彼女の心を再び動かした文はこういうものであった。

「僕は京子という女性と結婚し、とても幸せな夫婦生活を送っていたが突然悲劇は起きた。妻の死後、やる気も生きる気も起きない時に君の夢を見た。きっと私思いの妻が、まだあなたは死んではいけない、もっと生きて欲しいとの願いを込め、一度手を離れてしまった君ともう一度で会わせるためにこの夢を見せたのだと思う。そう、妻を愛しているが本音を言うと僕はそれでも君を忘れていない。またこんな僕でも好きになってくれませんか？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2476f/

十年後の気持ち

2010年10月9日16時34分発行